## 首人形（いちろんさんのでっころぼう）

保元の乱（西歴一、一五六年）に左大臣藤原頼長に味方した源為義は武運拙く敗れ、その子為朝は共に捕われ伊豆の大島に流罪となることになった。

その頃には鳥も通わぬ孤島、大島は行きがあっても帰りが無いと云われ死罪につぐ重い刑の一つだった。大島への船出の場所は今の下清水の住吉神社と八幡神社との一段高い丘の前で、矢部の渡しの東寄りの港口であった。

丁度出発を前にした夜から、海は大荒れに荒れ始めたので仕方なく海の静まるまで船出を五、六日延期することになった。五、六日滞在することに決った為朝は、今生の思い出にと愛用の弓を引くことを護送の者に云い付けたのである。

ご承知の通り弓を取っては天下無双の為朝、南の空の彼方に向ってヒューと弦をしぼり放った。矢はうなりを生じて矢部の渡しの川洲の処を通り過ぎて何処ともなく飛び去ったのだった。この川洲は後で矢が通ったとて、即ち『矢通り』と名称を付けるような地名となった。海も静まり愈々出発の朝となった。為朝は武運を宿舎であった月見里（やまなし）稲荷神社に祈願し、神主に厚い待遇を受けた記念に礼心をこめた二つの品を遺品として為朝愛用の石印と笠を稲荷神社に奉納して、名残りつきぬ清水港を後に還らぬ大島へ去っていった。

不遇ではあったが、今も昔も人気の集る人の心は変りないと見えて、源為朝にあやかるようにと月見里（やまなし）稲荷神社にお参りする人が年々多くなった。当時誰が云うとなしに虚弱の夜泣きする子供は為朝様のような強い人になりますようにと祈願し遺品の笠を頭にかぶれば健康になると云われるようになった。

こゝ、「入江の庄」に京都の去る武士の流れを汲んで、この地に住んでいる人形師に『**市郎右衛門**』と呼ばれる者があった。市郎右衛門は張子ものが上手で、その上鬼に金棒と申しましょうか、似肖像を造るのが特に上手を通り越して名人であった。だから自然に祈願納め、為朝の似顔像を造るのに評判が高かった。笠かむりは何時の間にか変って為朝の似首像を拝み、願叶ふ時は月見里稲荷へお礼にこの似顔首像を納めに行くようになった。子供の夜泣きも止った。いつかこれが近郷、近在の習慣となって**市郎右衛門の木遇の坊**が清水言葉の**【いちろんさんのでっころぼう】**と云われるようになったのである。この市郎右衛門と云う人は為朝の似顔首像の外、いろ〳〵の首像を造った。大小二別があり小はその種類頗る多く武者もの、奴等の外、天神、鬼、天狗、烏天狗、お多福、狐、猫、猿、河童等実に多種で串も長く出来もみな可愛いくまとまっていて優秀品である。大型はその顔に徳川時代の匂いが濃厚に残っており、そゞろに懐しいものである。昔は玩具と云うものがあまりないので女の子も男の子も首人形に着物をきせて『デッコロ〳〵』と愛玩したものだそうである。

## 張子の虎（いちろんさんのはりこのとら）

名人市郎右衛門が『**張り子の虎**』を造りますと、参勤交代の武士達の間に虎は千里走って千里帰る。死しても皮を残すと云うので大変な評判となり、土産物として良く売れたものである。又子供達が虎の如くすばしこくなりますようにと買ってくれたものである。子供達も昔は自然に動くと云う玩具はありませんでしたので大変喜んだそうである。国際港、清水に入港する外人はこの**張り子の虎**にワンダフルの声を放ち、故国へマスコットとして持ち帰り、全国各地の郷土玩具即売会場に於ても好評を博して居るのである。初代市郎右衛門以後代々名師相継ぎ『市郎右衛門』を名乗り入江の庄に住み似顔首像の**【いちろんさんのでっころぼう・張子の虎】**を造り多くの人々に膾炙されている。現在、郷土玩具として郷土玩具愛好家のお奨めにより「清水名物郷土玩具」として「いちろんさんのでっころぼう・張り子の虎」を製作しているのである。

稲津浅太郎記


清水名物郷土玩具

首人形
張子の虎
のしおり

駿州江尻の宿（入江の庄）

7代目 人形師 堀尾市郎右衛門

民芸品

いちろんさん

清水市入江2丁目1－9

電話〈0543〉67－1831